



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第18回例会(11月9日)
平成24年11月16日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例 会 場 同上 TEL(651)1111(代)
FAX(653)5622
例 会 日 毎週金曜日12時30分～

会 長 藤村 文昭
幹 事 佐藤 重昭
会 報 福田 荘介
クラブ直通電話 TEL(653)5682

奉仕を通して平和を Peace Through Service..... RI会長 田中作次

■ 新入会員卓話



「復興支援 いま NHK 盛岡がやろうとしていること」

NHK 盛岡放送局 局長
道脇 清文 君

去年の3月11日以降、NHKは膨大な時間を使って震災関連の放送を出してきました。その放送に携わっている者が共通に持っているのは、2万人近くが犠牲になるという未曾有の大災害からどうすれば早く立ち直れるのかという問題意識だと思います。またそれを全国・世界に向けて発信したいという、放送局に勤める人間であれば当然持っている職業意識でもあると思っています。しかし、被災地に向けての放送としてはどうだっただろうかと考えてみると、必ずしも十分ではなかったという思いを誰もが持っています。

地震が起きた時、私は東京にいて「ニュースウォッチ9」という番組の編集責任者をしていました。番組では、刻々と変わる被害状況や避難所の様子、福島第2原発が今どうなっているのかを連日放送していました。驚いたのは番組を見ている被災地の人たちから寄せられる反響の多さでした。ファックス、メール、電話を合わせると毎日1万件は超えていたのではないかと思います。「食料などあらゆる物資が不足している。おにぎり一つを4人で分け合っている。」「いわき市のことをもっと伝えて欲しい。食料

やガソリンがない。断水も続いている。」「映像に出ていた人が自分の探している人か知りたい。」「今必要なのは安否情報だ。避難所の避難者を1人1人画面に出してくれ。」などといった意見が押し寄せてきたというくらい届きました。

この番組は、通常夜9時から10時までの放送なのですが、震災直後は夜中の12時まで延長していましたから、その日の反省会と翌日の準備は早めに済ませて、できるだけ仮眠時間を長くとれるようにしていたのですが、ある時、1人が「被災地からの反響の多さは尋常じゃない。我々は被災地の役に立つ情報を被災地に向かって放送し、全国の人にはそれをそのまま見てもらおう」と言い出しました。私たちは「…あまねく公平・公正に…」と教えられているので、当然反対意見も出て、長い時間議論した結果、当初に出された案を採用することにしました。

生の声を紹介するために、スタジオにファックスを貼り付けたボードを並べたり、その声に答えるために、スタジオから政治家や行政機関に電話インタビューをしたりということを何度

か行いました。これでできることはやっているという気になっていました。

ところが、この夏に盛岡に赴任して、沿岸の人たちの話を聞いたり、いろいろな記録とか報告書を見たりしているうちに、ちょっと違うなと思うようになりました。やはり、東京で考えて東京から出す放送と、岩手で考えて岩手から出す放送はたぶん違うのだろうなと思ったわけです。

では、何をやっているのか、あるいは何をやるようとしているのかということですが、大きくいって3つあります。

第1は、東日本大震災のように大きな災害時には、東京から出している放送を中断して、盛岡から独自の放送を出せるようにしたことです。

衛星放送ではない地上のテレビ放送の場合、通常は、全国向け・東北地方向け・岩手県向けという3通りの放送がそれぞれ決まった時刻通りに放送されています。ところが、大きな災害が起きると、東京の放送センターにある報道局と編成局の判断で、新聞のテレビ欄にある通常の番組を断ち切って、強制的に臨時のニュース放送を始める決まりになっています。去年の3月11日も午後2時46分51秒に出された緊急地震速報の放送に続いて、午後2時48分20秒から強制的な臨時ニュースを始めました。

問題なのは、この強制的な臨時ニュースというのが、東京から全国向けに放送されるという点でした。大津波が迫っているのに、テレビの画面の真ん中に映し出されている映像が東京都内のビル火災だったりしました。また、沿岸に大津波が繰り返し押し寄せているのに、テレビの画面は、長々と首都圏のコンビナート火災を伝え続けていました。

少なくとも岩手、宮城、福島では、即座にロー

カル放送に切り替え、画面の文字情報だけでなく、ロボットカメラの映像やアナウンサーが読む原稿で、津波から逃げろと伝えるべきだったのに、それができなかったのです。

なぜローカル放送に切り替えられなかったのか、それは報道局と編成局の判断を経たうえで強制的な電気信号を出してまで通常番組を断ち切って開始した放送内容を、一地方局の判断だけで再び変更するという事態が想定されていなかったからでした。つまり震災報道は事前につくったマニュアル通りに行われるので、職員は東京から放送を出すことを想定した配置についていますし、強制的な電気信号を断ち切るための手順も定かではありませんでした。

これを改めるために、本部を説得し、マニュアルを現実的なものに改訂し、職員すべてに周知するという作業にかなりの時間を費やし、先月になってようやく、大災害に直面した時には盛岡局独自の判断で岩手ローカルに切り替えることのできる体制を整備することができました。

第2は被災地を支援するためのローカル番組の新設です。

これまでもNHKスペシャルをはじめ数多くの震災・復興関連番組を放送していますが、来年4月から月に一本のペースになりますが、盛岡局制作の「ふるさとの記憶」という番組を放送する予定です。この番組は、震災ですっかり様子が変わってしまった沿岸部のそれぞれの街を模型で復元していく過程を、街の人たちのインタビューや昔の写真などを織り込みながら描くドキュメンタリーで、月はじめの金曜夜7時半からの放送になります。

実は全国の大学が参加して「失われた街復元プロジェクト」という取り組みを行っているのですが、ここと協同して進めようというもので、

ようやく実現の見通しが立ったところです。

街を模型で復元していく過程を描くという手法はテレビの世界でよくあることですが、今回こだわろうとしているのは、模型に震災以前の色を塗るということです。詳しくは言えませんが、専門家の話では、街のどこがどんな色をしていたのかには必ず理由があるということで、その理由を証言や過去の写真を手がかりに探しながら、忘れつつあっても人々の心に奥深く眠っている「ふるさとの記憶」を呼び覚まし、記録として残そうというのがねらいです。

この番組の放送を軸にしながら、取材・制作の過程でかなり集まることが期待できる写真や動画などの資料をまとめて、街の人たちに提供する方法も考えることにしています。また沿岸部の街全部の復元模型ができれば、1カ所に集めてプレゼンテーションする事業展開も考えようと思っています。

第3は岩手県向けのラジオ番組の放送を再開させたいという、今の段階では願望で、再来年

度ぐらいに何とかならないか、あれこれ頭を悩ませているところです。

実は今年の4月から毎週月曜日の午後7時45分から8時までの15分間だけ、「がんばろう いわて」という番組をラジオ第1放送で出していますが、来年4月から火曜日の同じ時間帯でも放送することにしていて、これをさらに拡大させて、月曜から金曜までのもっと昼間に近い時間帯に出せないかと考えています。

これも3.11の反省からでてきた考え方です。人員削減に伴ってNHKのラジオの県域放送はなくなってしまいましたが、震災で停電した被災地の人たちが望む安否情報や生活情報、あるいは安心感とか励ましとか一番大事なものは多局のラジオ放送で届けられていました。

普段からやっていないことが、災害があったからといって即座に出来るわけもなく、NHKは人々の安心・安全を支えるのが使命だとうたっている以上、県域向けのラジオ番組の復活は、もしかしたら3つあげたテーマの中で、最も大切なことなのかもしれません。

例会報告

第18回例会 平成24年11月9日(金)

- 於 川徳 12時30分 開会点鐘
- ・司会 長澤 茂副会長
- ・ソング 我らの生業
- ・四つのテスト斉唱
- ・皆出席バッチ 熊谷祐三君(27年)。
- ・会長報告 長澤 茂副会長
- ・入会祝 伴 亨君。
- ・誕生祝 谷藤和彦、熊谷隆司、千

- 葉隆史君。
- ・結婚祝 道脇清文君。
- ・幹事報告 佐藤重昭幹事

【ニコニコBOX】

- ◆熊谷祐三君…この度秋の褒章で藍綬褒章を戴くことになりました。主に法人会の活動を通しての納税功勞によるものだそうです。まだ実際には頂戴しておりませんので実感は湧きませんが、これも偏に皆様のご指導・ご鞭撻のお蔭であり、心から感謝申し上げます。あ

りがとうございました。

- ◆佐藤重昭君…熊谷祐三会員の藍綬褒章ご受章おめでとうございます。心より御礼申し上げます。

●メーカーアップ

盛岡北R.C.=佐藤(義)君。盛岡西R.C.=矢後君。盛岡東R.C.=熊谷(祐)君。盛岡西北R.C.=平井(滋)・若松君。盛岡滝ノ沢R.C.=吉田(育)君。クラブ委員会R.C.=福田(荘)・吉田(幸)君。

●「ロータリーの友」11月号より

RI 会長 田中作次

ロータリー財団はロータリーの土台

親愛なる朋友ロータリアンの皆さん、ロータリー財団を説明する方法はさまざまですが、私は、ロータリー財団 (Rotary Foundation) とは文字通り、ロータリーを支える「土台 (foundation)」であると考えます。自分の足元の地盤について考えたり、家を支えている柱について考える人はあまり多くありません。あるのが当然だと考えているからです。なくなった時に初めて、そのありがたさがわかるものです。

考え方を一変させた大震災

2011年3月11日金曜日、日本では、足元にある地盤が崩れ落ちました。マグニチュード9の大地震が日本を中心から揺さぶったのです。1万5,000人以上の人が亡くなり、6,000人近くが負傷し、現在もほぼ3,000人の人が行方不明です。この災害による損失は、合計で3,000億ドルを超えるとも言われています。

ほんの数時間で、裕福な先進国に住む約50万人が、何もかも失いました。快適で安全な暮らしから、体育館やテント、壊れた建物の中での、不確かな未来への不安を抱えた生活へと一変しました。

地震に慣れていた日本では、何が起ころうと備えはできていると、皆、考えていました。これほど大きな災害に見舞われるとは、誰も予測していませんでした。

あの日に起こったことで、日本と日本に住んでいた人々は変わりました。自分たちの生活がいかにもろいものであるかを実感したのです。私はロータリーを通じて援助している人々の立場に、いつ自分が置かれるかわからないということに認識しました。

私たちは、皆同じ

財団を通じて支援する人々のことを、私たちは、何か自分たちとは違うという目で見がちです。彼らは遠い国に住み、私たちはそれらの人々の言葉や文化を知りません。水道水や衛生設備、医療、教育がないということがどのようなものなのか、わかりません。貧困、戦争、災害のニュースに関して、写真や記事を見ることがあります。私たちは、遠く離れたところから、苦境に直面している人たちを見ていますが、彼らの立場に自分を置いて考えるのは、難しいものです。

私たちが支援するこれらの人々と私たちとを隔てるものは何もない、ということをご理解いただきたいと思います。私たちは、皆同じです。取り巻く環境が違うだけなのです。

財団を通じて、「世界でよいことをしよう」という財団のモットーを実践することができます。財団を通して、一人でするよりももっと多くの良いことができるのです。財団に大きな関わりがあるのは、私たちと何ら変わることはない人々なのです。

・ 11月16日(金) ゲスト卓話 池田克典氏 (岩手県文化振興事業団 理事長)

「文化芸術と復興支援」

23日(金) 祝日休会 (勤労感謝の日)

30日(金) ゲスト卓話 山本玲子さん
(石川啄木記念館 学芸員)

●本号編集担当 / 駒木 進

●次号編集担当 / 谷藤 和彦

プログラムの
お知らせ